

「声優おたく」はアンドロジニー？

沢崎 壮宏

身体がもっとも目立つ日常の話題となって久しい気がするが、上部構造ばかりを論じようとしてきたアカデミズムの世界でも、その研究課題として身体が取り上げられることはもはや珍しい話ではない。これまで専ら医学の領域に追いやられてきた身体が、今では人文諸科学においてすら最も好まれる話題の一つとなっている。もっとも、身体と言っても、高度に抽象的で不可視なものから即物的な肉体に至るまで、何でもかんでも都合よく放り込める合切袋の観があるのだけれども。

「日本でもアメリカでも、人々がひととき健康な体作りに熱中し始めたのは70年代以降のことであり、その背景には日本では高齢化社会に対する不安、アメリカではケネディ暗殺やベトナム戦争、人種対立、離婚の増大と家族の解体などによって、社会という＜大きな身体＞そのものが「病んでいる」との意識が広まったことがあると言われる」(荻野美穂『身体化されるジェンダー』、勁草書房、2002、第10章「美と健康という病」、p. 367-368)。

フィットネス・ブームの背後のより深いところにあって人々を突き動かしているもの、その正体が公衆道徳への渴望にほかならない、と指摘する声もある¹。なるほど、従来の大衆道徳——家父長制に代表される——が終焉を迎えつつあると考えることに大きな違和感を覚えることはないように思う。新しい大衆道徳を渴望してなのか、あるいは、道徳そのものの反発なのか、いわゆる「ニュー・エイジ」の登場は社会全体の病理を告げているようにも見える。彼らは種々のサブ・カルチャーを発信し続けているわけだが、その幾つかについては今やメジャーになりつつあって、その様子は正しく社会全体の病理を告げる最も分かりやすい症状の一つなのかもしれない。

だが、病理は必ずしも抑圧されるわけではないらしい。実際、昨今のアメリカでは「オタクgeek」が若者の間で大いにもてはやされ、彼らのマニャックな言動は白眼視される

どころか、羨望的ですからあるそうで、個々に固有の欲望(fetish)を満足させようとする個人主義は今や、「オタク」においてその最新の局面を迎えている。ビル・ゲイツという「オタク」の成功がそのようなブームの火付け役らしいが、そもそも、個々人の欲望を強調しようとする動向そのものについて言うならば、その始まりは収穫の無際限な通増を信じる生産主義——楽観的で労働志向——から収穫の通減をこそ主張する消費主義——だから悲観的で遊戯志向——へのパラダイム・チェンジ[イデオロギー・チェンジ]にまで遡り、そして、その転換のきっかけは「限界効用」の発見において認めることができる(限界革命marginal revolution)²。生産から消費へとその根拠を移した価値観が消費者個々の欲望にスポットライトを当てるとき、正常(normal)と倒錯(perversion)との距離はもはや程度の差でしかない。ヨーロッパを「退廃degeneration」が支配した19世紀末(Nordau, *Entartung*, 1892)、倒錯した欲望までが、性科学の名の下、そのリアリティを白日の下に晒しはじめたのであり、いよいよ公認されつつある病理は、とりわけゴシック小説の形で耳目を驚かせるようになった。スティーブンソン『ジキル博士とハイド氏』(1886)、ウェルズ『モロー博士の島』(1896)、ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』(1897)、…。

われわれがどうやら直面しているらしい病理とは、結局のところ、大量消費の欲望が倒錯した形となって現れてきているものなのだろうか。その倒錯を象徴する存在者こそが「おたく」である、ということなのだろうか。

さて、日本でロボット・アニメが登場して社会全体を巻き込むようになったのも、実のところ、1970年代以降のことであり、それらはしかも子供向けという体裁を取ってはいたものの、あるいは子供向けに製作されたからこそ、現状の社会[=大人]に対する不満ないし不安を描こうとしてきた。マッド・サイエンティストと闘う『マジンガーZ』(1972-74)にしろ、地球外超文明との生存競争を描く『宇宙戦艦ヤマト』(1974-75)にしろ、新しい人類の出現に期待を持たせる『機動戦士ガンダム』(1979-80)にしろ、科学技術批判に託して現状への不満をぶちまけようとした作品であったと理解できる。今だからこそ振り返ってそこに見出されるものは、高度経済成長にピリオドが打たれたことを悔しがる以上の不満、その間に発生した環境破壊[公害]を悲しむ以上の不安である。というのも、アニメ・カルチャーはその後大きく成長し、いわゆる「おたく」を生産するようになったのであり、社会一般に広く認知されるサブ・カルチャーとして定着するまでになった。サブ・カルチャーとしての認知であるから全面的な肯定的評価というわけではないに

ても、今や日本における「アニメおたく」の存在を疑うことは誰にもできない。われわれはだから、「アニメおたく」の出現を景気の変動に対する一時的なリアクションというよりはむしろ社会全体の病理を表現するものと考えたい。その病状はしかも益々進行しており、「アニメおたく」は「声優おたく」というヴァリエーションを生み出した。アニメ・キャラクターよりもそれらに声を当てる声優にこそ関心を持つ「おたく」たちは、生身の身体へとその焦点を移行させている。

以下、われわれはとりわけ「声優おたく」に着目して、その出現が表現しているであろう現代社会の病状について診断を下してみたい。まずは「声優おたく」を定義することから始めなければならないところだが、彼らの固有性は一体どこにあるのだろうか[1]。「声優おたく」が優れて男性的な現象であることにその固有性を認めるならば、新しい男性学の知見を利用してその性格を探ることが許されるであろう。われわれが注目するのはバダンテール(Elisabeth Badinter, *XY – de l'identité masculine*, Paris, 1992)の議論で、それによれば、女性の自己決定権取得——生殖において女性がイニシアチブを握る——に続く「父性革命」以降の男性はアンドロジニー(両性具有者)とならなければならない、その兆候はすでに西ヨーロッパでは確認されている[2]。だが、「父性革命」はまだ決して完成してはおらず、だからこそ、男性が両性性を獲得して人格を完成させるための条件が何なのかについて考えなければならない。バダンテールによれば、その条件は父親として子育てに参加することなのだが、そうすると、男性は結婚して子供を作らなければハッピーになれないということなのだろうか。母性の神話を暴いてセンセーションを巻き起こしたバダンテール(*L'amour en plus*, Paris, 1980)が今度は性差を強調し、伝統的な家族形成を礼賛しようとしているように見える。われわれとしては、アンドロジニーが今後の男性の理想である点は認めるとして、その条件については考え直してみたい[3]。その再考のための手掛かりが「声優おたく」の中に見出されるならば、「声優おたく」とは、実のところ、社会の病理を表現しているのではなく、それどころか、新しい社会形成の可能性を切り拓いてくれているのかもしれない。

1.1. 「声優おたく」

アニメーション作品に並々以上の関心を持つことが暴露されると、十派一絡げに「アニメおたく」というラベルを頂戴することになるが、実のところ、その中には幾つものヴ

ァリアントがあって、作品そのものに興味を抱いてその鑑賞に甘んじる者もいれば、過度の感情移入から関連グッズの収集に奔走する者、声優を迫りかけてその後援活動に精を出す者まで様々である。そもそも、最近のアニメ作品そのものに豊かな多様性があって、あらゆる種類の「アニメおたく」があらゆる種類のアニメ作品に食指を伸ばすわけではない。そんなことはとてもできないくらいにアニメ作品のインフレーションは加速しており、だからこそ取捨選択が必要となる。「アニメおたく」ほどその選別の基準はむしろ厳しいと言ってもよいのではないだろうか。要するに好き嫌いが激しいわけだが、その好き嫌いを声の配役、キャスティングに基づいて決定しようとする者たちを、以下、「声優おたく」と呼ぶことにしよう。

『新世紀エヴァンゲリオン』(1995-96)のヒット以降、「[第二次]声優ブーム」と呼ばれる現象が若者文化を席卷し、ブームは沈静化しても、声優人気は相変わらずの様相を呈している。複数の声優雑誌が刊行され³、声優が人気ラジオ番組のパーソナリティーを務めることも珍しくなくない(「アニラジ」)。あるいは、アニメーターの養成機関が多々あって、声優の養成コースを設置していない機関がほとんどないことから、声優に対する社会的関心が高まっていることは疑えない。だが、声優人気にも二種類あって、アニメ作品の視聴者に自分も声優になりたいと思わせるような、言わば健全な人気のみならず、声優について批評することに熱を上げる「おたく」たちによって形成されるような種類の人気もある。「声優おたく」はふつう、自分で声優になろうとまでは考えない。

能動的な鑑賞者であろうとする評論家とはそもそもパラドキシカルな存在者だと思うが、そのパラドキシカルな性格を分け持っているからこそ、われわれとしても「おたく」についての考察に興味を引かれる。「声優おたく」は「アニメおたく」から出発しているが、アニメ作品そのものからその製作スタッフ＝裏方へと関心の的を移し、その分、虚構から現実へと興味の焦点を移行させているわけだが、そのくせ、現実そのものに巻き込まれることには断じて同意しようとしない。だから、自分で声優になろうとまでは考えないし、生身の身体へと関心の焦点を移行させると言っても、その身体はあくまでキャラクターに重ねられたかぎりでの身体である。「おたく」の前に登場する「声優アイドル」たちはだから、アニメ・キャラクターを声で演じるのみならず、生身でも同じキャラクターを演じ続けなければならない(「コスプレ」)。

現実を志向しているようでいて、生の現実の一步手前で立ち止まろうとする性向は、しかしながら、「声優おたく」の専売特許というわけではない。演じられる作品を片端か

ら論評したがるマニアックな鑑賞者というものは、演劇一般についてその存在を確認することのできるものであろう。

1.2. 「宝塚ファン」

例えば、「宝塚歌劇」には熱烈な支持者が多く、そのマニアぶりが世間の耳目を引くことも珍しくない。彼らもまた、自分で舞台に上がって注目を浴びようとまで思っているようには見えないし、演じられる作品そのものというよりも、その演技者の裏事情にこそ関心を寄せているように見える。そもそも、なぜ「宝塚歌劇」なのか。若い女性だけで構成され、その分だけ本格的な性格を欠いているように見える「宝塚歌劇」にそこまで強く執着することができるのはどういうわけなのだろう。

「宝塚歌劇」と聞いて誰しも念頭に思い浮かべるであろう疑問であるだけに、「宝塚ファン」としても答えは決まっているようで、例えば次のように定式化される。

- ① こんなに美しく豪華な舞台は宝塚だけ。宝塚は夢の世界だから。
- ② 宝塚の生徒は未婚の乙女のみ。期間限定の輝きが美しく価値があるから。
- ③ 本格的な芸は求めている。宝塚にはスターの輝きを見に行く。

華やかさが強調されればされるほど、その性に関する偏りはますます際立ち、結局のところ、「本格的な芸を求めている」という意見に行き着くのであろう。さらに正直な意見を聞くこともできる。

「小さい頃からバレエで鍛えられた人のカラダはとんでもなく真っすぐで柔軟だし、ソプラノがきれいな歌の人のカラダは豊かでまろやかな線をしている。演技の人は役柄に合わせてカラダに通う血液の速度まで違うみたいに見える。私たちはこういう鍛えられたカラダを持つ人の芸が見たいんだよね。だからスターが目的で宝塚を見るというのは少し違う。カラダが目的、いや、技が目的なの」(田辺麻紀／長峰洋子『宝塚 悩殺武芸長』、DAI-X 出版、2001、p. 5)。

性現象化(sexualization)された身体こそが、実のところ、関心の中心を占めている、ということが分かる。宝塚少女歌劇団(1914～)[宝塚歌劇団(1940～)]の歴史の中には、途中、本格的な劇団を目指して男子生徒の入学が検討されたこともあったらしいが、その都度、

熱烈なファンの猛反対で実現に至ることはなかった⁴。ファンとは自分自身の欲求にだけ正直なものである。

演じられる作品そのものよりも演技者にこそ熱い関心を注ぐ「宝塚ファン」は、だからこそ、自分で壇上に上がろうとまで考えることはない。男性にはそもそもそのチャンスがありえないし、女性にしてもそのチャンスに恵まれることは稀であろう——宝塚音楽学校と言えば超難関だし、もちろん年齢制限もある——ことを考えると、彼[女]らの多くが演劇そのものに関心を抱き、いつか自分で演じる日を夢見ているとはますます思われぬ。

われわれはさらに、少女たちの「期間限定の輝き」を追求する「宝塚ファン」の中に自分からマイノリティーを志向する心性を発見することができるし、これもまた、「おたく」の心性に共通している。そもそも、「宝塚ファン」に限らずとも、あらゆる種類のファン心理として理解することのできるメンタリティーなのかもしれないが、大衆化への嫌悪こそ、次から次へと隠語を駆使しては、自他の境界線をますます厳しくしていく「おたく」の心性をもっともよく表現するものである。そもそも、「おたく」を自認することは自分を少数派として認知することであり、自分に「おたく」というラベルを張って、自分を社会規範の外に置くことを楽しもうということである。

だが、大衆化を嫌悪するだけのアウトローということならどの時代にも見出されるのであって、優れて時代先端的な現象である「おたく」に固有の心性を説明するものとしてはまるで物足りない。だが、「おたく」に固有の心性とはいったい何なのだろうか。「アニメおたく」の固有性とは？ ましてや「声優おたく」となると、その固有性を突き止めようとするのはもっとも大きな困難にさらされている。というのも、特定の声優に愛着を持って追い掛け回すことと他の有名エンターテイナーに愛着を持って最良にすること、両者の間に大きな差、本質的な違い[種差]を見出すことは難しいように思われる。

そこで、われわれとしては、性差に関する固有性を仮定して、以下、「おたく」の固有性についての調査を続けることとしたい。まず、「宝塚ファン」について言うならば、公の場で論評するということになるとうしても男性ファンが目立ってしまうのかもしれないが、観劇の現場においてその圧倒的大部分を占めているということになると、周知の通り、女性ファンこそが「宝塚ファン」である。ご最良を作り、ファン・クラブを立ち上げ、日夜その後援活動に心血を注いでいるのは、大抵の場合、女性ファンである。「宝塚ファン」に固有のメンタリティーの形成に本質的に貢献しているのは女性であり、したがって、「宝塚ファン」とは優れて女性的な現象であると言っても間違いではないであろう。

だが、最近は男性の観劇も増え、とりわけベテランの男性ファンともなると女性ファンとの間に奇妙なコントラストを形成して、女性ファンから煙たがられているらしい。特定のご贔屓にばかり熱を上げる女性ファンの多い中、男性ファンは各組のあらゆる作品を満遍なく観劇し、鑑賞眼を鍛え、そして、その成果を劇評として開陳し、舞台上の細かな点にまでチェックを入れようとする⁵。男性ファンは詮索することそのものを楽しんでおり、そして、詮索したものについて論評せずにはいられないという点で彼らは「おたく」に似ている。

詮索して論評することがとりわけ男性的な振舞いで、詮索そのものに対する嗜好こそが「おたく」を形成する主要なメンタリティーであるとするならば、「おたく」は優れて男性的な現象だ、と主張したくなる。実際、「おたく」を構成する大部分のメンバーは男性であり、そのブームを牽引にしてきたのは、少なくとも表向きにはいつも男性であったと言ってよいであろう。いまさら驚くべき指摘でもないが、「おたく」と言えばどうしても男性の顔が思い浮かんでしまう。女性の「おたく」がないわけではないし、その偏執の度合いが穏やかなわけでもないと思うけれども、とにかく、「おたく」として公私に目立つのは専ら男性ばかりであり、実際、男性の「おたく」が圧倒的に多いことは間違いないと思われる――「おたく」人口やその男女比に関する統計データは今のところまだ見当たらないようである。「アニメおたく」にしても、「声優おたく」にしても、やはりその圧倒的大多数は男性であると思われるので、ここでは、その数の比に基づいて、「声優おたく」が優れて男性的な現象であると断ずることとしよう。彼らの振舞いの内実に関する男性的性格についてはまた後で論ずる[3]。

1.3. 「変異の法則」

実際、偏執的な振舞いが男性に多く見られることが生物学的事実として承認され、定理として規範化され、法則として通用していた時代がある。

『種の起源 *On the origin of species*』(1859)は「変異の法則」(第五章)の名の下、個体間の偏差をもたらす外的条件について細かく考察している。その条件は無数にあって、その数を尽くすことも、その一々について説明を尽くすこともできないわけだが、雌雄選択(sexual selection)がそのもっとも重要な条件の一つと考えられていることは明らかである。雌雄選択を積み重ねて形成される第二性徴こそがもっとも大きな変異を引き起こすからである。だが、雌雄選択は雌による雄の選択なので、その集積の結果である第二

次性徴は雄においてばかり目立つものとなる。

科学の世間的流用に対してもっとも慎重だったと評判のダーウィンですら、自らが帰属するヴィクトリア朝中流階級[ブルジョワ]の性別規範の影響をやはり免れてはいない。ダーウィン自身がはっきりと結論しているわけではないにしても、顕著な第二性徴が雌において稀であること(第五章)、第二性徴が大きな変異を産み出すこと(第五章)、大きな変異がそれだけ優勢な種を形成すること(第二、四章)、これだけのことから男性の女性に対する優位を導かないことは難しいし、ヴィクトリア朝の性別規範を正当化するものであるだけに、なおさらその誘惑には抗いがたい⁶。

実際、ハーバート・スペンサーは抗うことができなかった。ダーウィンに先んじて「最適者生存 survival of the fittest」を唱え、進化論哲学を構築していたスペンサーにとっては、「生存競争」を勝ち抜くための身体の頑強さこそが肝心で、その健康を維持することが道徳——「身体的道徳」——を形成するほどであった。だからこそ、知育偏重を告発する彼の口調は厳しく、身体に備わっている有限量としての生命は何はさておき、身体の健全な成長にこそ先ずは注がなければならない。精神の発達はそのベースである身体の成長に全面的に依存するので、慌てて精神を鍛えてもその甲斐がないというわけである。だが、身体の成長には明らかな性差がある。

「少女は身体と精神が急速に発達するが、比較的早期に成長が止まる。少年の身体と精神の発達は少女より遅いが、より大きな成長を遂げる。前者が成熟し、完成し、全機能を最大限に働かせている年頃に、後者ではその生命の生命のエネルギーは大きさの増加に大部分向けられていて、構造においては相対的にまだ不完全である。彼の身体および精神の働きがかなりぎこちないのはこのことを示している」(*Education ; Intellectual, Moral, and Physical*, 1860 ; 『知育・徳育・体育論』、明治図書、1969、p. 213)。

身体の成長に関する女性の早熟からは、女性の人間としての未熟が結論される。第二性徴が大きなバラツキを産み出す男性に対し、早く成長が止まる女性はそれだけ子供に近く、したがって、女性において群を抜く卓越性が見出されることはない。だから、優秀な人間は男性に限られる、ということになる。そして、ヴィクトリア朝の性別規範を正当化する誘惑に屈したのは哲学者だけではなかった。科学者たちもまた性差についての科学を立ち上げ、科学の名の下、男性の女性に対する優位を擁護して現状を肯定し

ようとした。頭蓋測定学(craniology)、人相学(physiognomy)、骨相学(phrenology)、…⁷。

「おたく」が要するに変わり者のことであるなら、その多くが男性であることは生物学的に言って当然のことなのだろうか。なるほど、「変異の法則」を引き合いに出して、「おたく」が優れて男性的現象であることを正当化できれば、われわれの議論にとっては都合がいいし、だからこそここでも言及したわけだが、しかし、「変異の法則」の科学において占めるべきステータスについては疑問を抱かないわけにはいかない。ダーウィンはそもそも変異を導く外的条件について語っているにすぎない。ダーウィン(『人類の起源』、1871)を引き継いで性に自然法則[自然法]を持ち込もうとした最初の性科学者たち、クラフト=エビング(『性の病理』、1886)、ハヴェロック・エリス(『男性と女性』、1894)、フロイト(『科学的心理学草稿』、1895)、彼らの生物学的決定論についてはすでに何度も告発されてきている⁸。

そこで、われわれとしては、「おたく」が優れて男性的現象であるという命題をあくまでも仮説として立てることとし、その論証として生物学ではなく、社会史の力を借りたいと思う。性差が自然の産物である以上に社会構成的なもの、ジェンダーであると考えるからである。

2.1. 身体史：女性史から男性史へ

さて、冒頭で身体ブームに言及したけれども、社会史もまた身体を論じないではない。だが、身体に歴史が認められるようになったのは比較的最近のこと——日本では1980年代以降——であり、人間における身体が超歴史的な生物学的与件などではないと漸く認められるようになってからのことである。では何なのかというと、社会的あるいは文化的な構成物だというわけである。そして、身体が社会的な構成物であるかぎり、社会が性別規範に基づいて形成されているかぎり、身体が性別を持たないはずはない。男性の身体であるか、女性の身体であるかによって、その身体の社会的構成には大きな違いが生ずるはずであるが、これまで研究されてきたのは専ら女性の身体ばかりであった。

身体史がマイナーな研究分野で、だからこそその担い手の多くが女性であったせいもあるし、男性についてはオーソドックスな歴史研究の中ですでに論じられてきたという誤解があったせいでもある。

「改めて言うまでもなく身体を生きているのは女だけではない。男もまた現実には女とは異なる性的特徴を備えた肉体を持ち、「女」に対する「男」という形で記号化された性差の文化を生きている。ところが普遍的・抽象的概念としての「人々」や「人間」としてではなく、「女」という特殊に対するもう一方の特殊に過ぎない存在としての「男」はこれまでにどれだけ学問研究の対象として登場してきただろうかと考えてみると、そのような例は極めて稀であることに驚かされる。これはなぜなのだろうか。

「まず考えられるのは次のようなことである。女性史はその出発の頃、しばしばこれまでの歴史は事実上すべて男性史であったと主張した。歴史学の対象として認められていたのが公の世界、すなわちジェンダー秩序において男の領分とされる世界のみであり、登場人物の大部分が男、価値判断の基準もまた男中心であったという意味では、この主張は正しかったと言える。しかし人間＝男という前提がほとんど空気のように意識されないまま内面化されてしまっていた世界では、かえって男は自分を「男」として対象化して見る契機を失ってしまったのではないだろうか。そのため、「人々」ではないそれ独自のものとしての「男」の身体やセクシュアリティを研究することには、あえて思い至らなかったのかもしれない」(『ジェンダー化された身体』、第3章「身体史の射程」、p. 112-113)。

実際、性科学の登場が性の解放として称揚されようが(ポール・ロビンソン『性の近代化』、1970)、抑圧の新しい形態として告発されようが(フーコー『性の歴史Ⅰ——知への意志』、1976)、男性個々の性現象化された身体について、その解放の是非が論じられることはなかったように思われる。というのも、性科学そのものが男性身体の解放について論じていない。共通祖先からの分化の結果として性差を相対化することをダーウィンから学んだはずの性科学は、そもそも、男性の身体を解放してこなかったのであり、そのような性現象化における話題の対象はいつも女性と子供とに限られてきた。

性科学の登場に先立って、ロックの労働価値説が財産所有に基づく個人主義[ブルジョワ個人主義]を新しく打ち出したとき、その所有を具現していた男性がそれだけで個々の身体の解放を済ませてしまったかのようである。そのとき個人主義のまだ及ばなかった家庭の内側に取り残された女性と子供の解放にばかり、以降、救いの手は差し伸べられてきた。だが、封建制の全体主義的枠組みの中に取り残されたのは女性と子供だけだったのだろうか。一家の財産所有権を体現する父親の意志に否応なく結びつけられてきた男性について、そこに性現象化された身体を見出そうとしても無理な話である。

さて、女性学の勢いは今や男性学に移行しつつあり、そこでは、男性が一個人として、身体がその個人を作り上げる存在者として分析される。女性の個々の身体が女性性を作り上げるように、男性身体の一々が男性性を作り上げるのである。その作り上げは、しかしながら、一々の社会の取決めによる構成であって、普遍的なルールに基づく演繹などではない。われわれは、以下、エリザベート・バダンテールの「男性学」に力を借りて、「おたく」という現象に見出される男性的な性格の吟味に備えることとしよう⁹。

2.2. バダンテール『XY 男とは何か』第3部

女性を生殖におけるその従属的な身分から解放した避妊・中絶のテクノロジーが取りあえず完成し、そして合法化されたのは、ヨーロッパにおいては 1970 年代のことである(「生殖の政治学」)¹⁰。バダンテールの「男性学」は、そのような生殖イノベーションの中に女性の自己決定権の奪還を見て取ることから出発する。女性が自分自身の身体について支配権を取り戻したことは男性にとっても見過ごせない事実であって、というのも、生殖におけるイニシアチブは、以降、女性が握ることとなった。男性はもはや女性の同意なしに子供を生産することができない。バダンテールにとって生殖におけるこの役割交代は既成事実であり、男性サイドがこの事実を受け入れるしか、もはや「男女の平和」に残された道はない。「貪る性」であった父性は今や根本的な変革を要求されているのであり、しかも、それはもう始まっている。

ゆっくりと進行する「父性革命」は男性が女性性を取り入れることに存する¹¹。そして、女性性を取り込んだ男性はアンドロジニー[両性具有者]となる。生殖における主導権を奪われた男性に要求される新しい「男らしさ」は女性を懐柔する「男らしさ」であり、それは「女らしさ」を兼ね備えているのでなければならない——兼ね備えるのであって、男性を女性にすればよいという話ではない。そして兼ね備えるためには、新しい「男らしさ」は「女らしさ」に似ているのでなければならない。というわけだから、アンドロジナスと言っても「男らしさ」を全面的に切り捨ててしまおうというのではなく、「男らしさ」を「女らしさ」と共存させて、両性的な新しいタイプを生み出そうということである。普遍派フェミニストのレッテルを貼られることの多いバダンテールは、だから、性差のキャンセルまで主張するようなラディカルなフェミニストではない¹²。というのも、彼女にとって、解剖学的な性差は厳然とした事実なのであって、男性についての考察はいつも、女性から生まれるという性差的事実から出発するのでなければならない。

男性性と女性性との共存可能性、両性性の可能性は、だからこそ、「女らしさ」ではなく「男らしさ」の形成にかかっている。自然から与えられる「女らしさ」に対して、「男らしさ」は人為的に構成されなければならない、その構成のための社会的取決めを導くルールこそ、人類学者たちが「構造 structure」として取り出してきたものにほかならない。「父性革命」は、だから、伝統的な社会の構造そのものを変更しようとする大事業なのであり、だからこそ、その完成には時間がかかるのであって、その間、われわれは新しい「男らしさ」の形成について考えてみなければならない。

さて、女性から生まれざるをえない男性は男性アイデンティティーを自分の手で勝ち取らなければならない、だからこそ「男らしさ」は競争すること(one-upmanship)に大きな価値を置くことになるわけだが、バダンテールによれば、その競争は「母殺し」からスタートする。女性から生まれるほかない男性は、最初、母親によって自分に押し付けられた「女らしさ」を抹殺することから始めなければならない。実際、男性性を聖別しようとしてきた伝統社会は男の子を母親から隔離して、「男を生むのは男である」(Aristoteles, *Metaphysica*, Z 7, 1032a, 25)と教え込んできたのであり、その手続きは一連の「成人儀礼」で念入りに仕上げられてきた。ここまでのところ、女から生まれることは「男らしさ」を獲得する上での障害でしかなく、伝統社会はここで立ち止まって「母殺し」に全精力を注いできたのである。

「父性革命」は、しかしながら、男にさらなる一步前進を命じ、仕上げられた「男らしさ」にさらに「女らしさ」を結びつけることを要求する。苦勞してせっかく切り落とした「女らしさ」を再び取り込まなければならないわけで、その取り込みの可能性は、実のところ、女性から生まれるという最初の事実の中にこそ見出される。「女らしさ」を取り込むためには、女性から生まれたことを、母親とかつて結んだ親密な関係を思い出さねえすればよい。「女らしさ」から出発してその抑圧に漸く成功した男性は、その「女らしさ」を今度は蘇らせなければならないのである。

「父性革命」は、要するに、「男らしさ」の獲得手続きを二重にしたのである。その結果、男性アイデンティティーは今や大いなる危機に晒されている。産業化され、消費主義が蔓延し、個人主義が支配する社会で、成人儀礼にもはや以前ほどの効果を期待することはできない。儀礼の後押しがなければ、男性アイデンティティーの獲得は早速、最初の「母殺し」でもう躓いてしまうのであり、その場合、男は「骨抜き男」の烙印を押される。だが、「母殺し」に成功してもまだ先は長く、「女らしさ」の取り込むがうまくいかなければ、や

はり男性アイデンティティーは完成しない。「男らしさ」だけの男は「鉄骨男」となるが、実を言うと、「鉄骨男」には人気がある¹³。伝統的な性別規範へのノスタルジーを体現しているからであって、このノスタルジーこそが新しい男性アイデンティティーの完成を邪魔する最大手であろう。両性的な男性を理想と認める合意はまだまだ社会全体に定着しておらず、「父性革命」の完成はまだ遠い先の話である。

「男らしさ」を打ち消してしまうのではなく、その隣に「女らしさ」を呼び戻して、母親との関係を復活させることが「父性革命」の完成にとってもっとも肝心である。そのためには、自分もまた母親の役割を引き受けることが必要で、バダンテールはだからこそ、父親となって子育てに参加することを男性アイデンティティーの完成のための最終要件と考えるのだが、…。

さて、われわれは今、「おたく」において個人主義の最新の局面に直面しているのであった。そこでは、個々に固有の欲望(fetish)を充足することだけが消費活動を動機づけるのであり、ノーマルな人間であるかぎり満足すべき普遍的でユニークな必要(the universal needs)という観念はもはや幻想でしかない。個人はあらゆる種類のモラルから解放され、正常から倒錯までの距離を測るべき尺度としての規範はもはやどこにも見当たらない。そもそも、その最新の局面に至るまでもなく、首尾一貫した個人主義者を縛るべきモラルなどあるはずもない。個々の欲望の充足だけがあらゆる行動の動機を与えるのであり、だからこそ、性科学はその欲望に自然法則[自然法]を持ち込んでモラルの可能性を擁護しようとしてきたけれども、それは全体主義をこっそり持ち込んでいるだけの話であり、そのようにして内部矛盾を孕んでしまっている。

われわれには、バダンテールが子育て＝生殖を持ち込んで、個人主義社会におけるモラルの可能性を擁護しようとしているように思われる。そして、生殖に成功するノーマルな男性に生殖できない男性の倒錯を対照させているようにも見える。そもそも、徹底的な個人主義者であっても生殖を通してモラルの可能性を擁護できるというのは、ディドロが「後世postéritéへの眼差し」に託して立ち上げた論理であった¹⁴。子育て＝生殖が果たして自然な規範でありうるのかどうか、進化論に立脚する文脈において安易に持ち込まれがちな前提であるけれども、その点についてここでは論じないこととしよう。というのも、いずれにせよ、生殖を持ち込むことなしに両性性の獲得に至っているように見える男たちをわれわれはよく知っている。

われわれはここで、「おたく」に生殖のモラルが通用しないことを仮定したい。彼らがあらゆる種類のモラルから解放されていることをわれわれは想像することができる。では、「おたく」という個人主義は将来の社会に対して何の可能性も切り拓いていないのか。それは、結局のところ、病理でしかないのだろうか。いや、「おたく」こそ、実のところ、アンドロジニーなのであって、そうだとすれば、子育て＝生殖は両性的男性の完成のための必要不可欠な条件ではないということになる。こっそり規範を持ち込もうとするようなあらゆる種類のモラルから解放されていながら、それでも「男女の平和」に貢献できる可能性があるとするば、それこそ真に新しいモラルの可能性そのものなのであって、その可能性は両性的な存在者、「おたく」＝アンドロジニーにおいて切り拓かれている。

優れて男性的な現象であると断じてきたはずのはずの「おたく」、とりわけ「声優おたく」は、実のところ、女性的な現象でもある。われわれは、以下、その「女らしさ」の起源について探してみたい。

3. 「声優おたく」はアンドロジニー？

優れて男性的な現象でありながら、普通、「おたく」が「鉄骨男」を連想させることはなく、それどころか、「おたく」と言えば「骨抜き男」の烙印をこそ真っ先に押されそうである。だが、「おたく」が「骨抜き男」でないことは、それが優れて男性的であるというわれわれの仮定からして当然のことであって、すると、「鉄骨男」でも「骨抜き男」でもないのだから、論理的に考えて、「おたく」は両性的な男性＝アンドロジニーということになる。いきなり両性具有者だと言い出すことによって何だか奇を衒っているかのような印象を与えるかもしれないが、実はそうでもない。

両性具有に新しい身体の可能性を見出そうとすることは、実のところ、バダンテールにオリジナルの斬新なアイデアというわけではなく、それどころか、すでに随分と手垢に汚れた考え方である¹⁵。その証拠に、両性具有と一口に言っても人によって様々なイメージで理解されるし、実際、その形態は様々で(同性愛、宦官、…)、しかも地域差まであるようである。

「最近、私はジャン・コクトーの『白書』(求龍堂版)を読んでショックを受けた。今まで漠然と考えていたホモ・セクシュアリストが、東洋と西洋とはまったく別物であることを知ったから

である。

「コクトーの挿絵は、前にもジュネの『泥棒日記』の特装本で知っていたが、実にギリシャ的で、美しい。そこには日本の春画のような陰湿なものではなく、地中海の太陽と風にさらされた銅鉄のような肉体が、誇らしげに男性の男性たる所以を赤裸々に顕示している。同じようにホモと呼ばれても、彼らの理想は完璧な男性になることで、女のような男ではないことを知った」(白洲正子『両性具有の美』、新潮社、1997、p.58)。

伝統的な日本人は、同性愛としての男色(「菊花の契り」)が昇華されて両性具有(「ふたなり」)に転ずる点にこそ固有の美を発見しようとしてきた。その最良の事例が「光源氏」であり、その女性的な艶かしさはもはや解剖学的な性差を超越してしまっている(「女にて身ばや」)。性差をキャンセルしようとする日本人の審美眼にはなるほど、力強い男性神のヘルメスと女性美の極致であるアフロディテとを無理やり同居させたような両性具有(hermaphrodites)はグロテスクにしか見えないのかもしれない¹⁶。

西洋における両性具有者は、しかしながら、人間が男女に分かたれる以前の完全無欠なアンドロギュノス(anēr + gynê)であって、だからこそ、完全性を追い求める哲学者たちの間ではもっともお気に入りの話題の一つであり、プラトン(*Symposion*, 189c-193e)が最初に言及し、教会権力が没落してからは啓蒙哲学者らによって掘り起こされ、以来、その熱い注目は今現在に至るまで冷めることをまるで知らない¹⁷。いや、キリスト教信仰の内部においても、実は、イエスを両性具有者として描く伝統があるそうで、そうすると、両性具有の伝統は西洋の歴史の全体を貫いているということになる。

例えば、啓蒙の哲学者であるディドロは宇宙の創造説を否定し、種に永遠の固定性を認めようとする伝統に頑として異を唱えた。つまり、種の一々を決定する形相に可変性を認めようとしたのであり、形相の可変性に限界を認めなければ、想像しうるかぎりのあらゆる生物が存在してよいことになる(「存在者の連鎖」)。ただし、あらゆる種類の生物が生き長らえることができるというわけではなく、環境にうまく適応できたもののみが生き残っていくのであり、環境が変われば、生存できる種もまた変わる。神による創造を否定し、種の固定性を信じないディドロはさらに奇形(monstres)の存在にも喜んで言及し、男は女の、女は男の奇形であるとまで宣言した¹⁸。あらゆる生物に共通の祖先が想定され、性差がそのプロトタイプからのバラツキの違いでしかないならば、性別に固定性を認める理由はなくなり、そうすると、アンドロジナスの可能性はむしろ大歓迎され

る。啓蒙の哲学者たちは、実際、博物学者たちと競い合っただけ両性具有の存在を支持する証拠を集めようとしたのであった¹⁹。

そして、われわれは今や、両性具有の証拠を「おたく」、とりわけ「声優おたく」において間近に見ることができる。啓蒙哲学者たちが探し求めたような解剖学的なレベルの両性具有ではないけれども、「おたく」のメンタリティーには確かに両性性を認めることができる。そもそも、「男らしさ」なり、「女らしさ」なりを同定するためのメルクマールが必要だが、「男らしさ」については「独立independence」を、「女らしさ」については「親密intimacy」をそれぞれの同定のための要件として採用することとして²⁰、以下、「声優おたく」の心性における両性的特徴を掘り起こしてみよう。

第一に、「声優おたく」たちが自分で声優になろうとまでは考えない、ということについてはすでに指摘した。このことは、批評する側の立場に身を置こうとする点で男性的であり、批評される側の競争社会から身を引こうとする点で男性的ではない。「声優おたく」は声優について論評しながら、自分が上位(one-up)で相手[声優あるいは論評の聞き手]が下位(one-down)であるというメタ・メッセージを発信する。だが、自分が声優として上位に君臨しようとは決して考えないのであって、アニメ文化を取り巻く環境の周辺に自分の位置を発見し、その位置の安泰を確認して安心する。見る側と見られる側の境界線が超えられないことによって調和ある親和が形成される。

第二に、「声優おたく」たちがアニメ作品そのものよりも、むしろその製作環境にこそ興味を寄せるものであることについてもすでに言及した。この点は「アニメおたく」との相違として指摘できるし、この点でこそ「声優おたく」は両性的な性格をより強くしているとも言える。出来上がってしまった作品が後は製作者の手を離れて独り歩きするという話は芸術作品についてよく聞かれることで、このように「独立」を象徴する作品そのものに強い関心を向けることはそれだけ男性的な営為であると判断できる。「声優おたく」も作品そのものへの関心を全面的に失うことはないので、男性的な性格を分け持っている。だが、彼らの関心の焦点は作品の製作過程にこそ置かれる。出来上がるまでの作品には、それが優れていればいるほど、普通は数多くの手間がかけられているはずなのであって、手間が多ければ多いほど、その間の調和が絶妙でなければならない。個々の声優の一々の演技そのものよりも、それらの間の見事な連携にこそ「声優おたく」を惹きつける秘密があるに違いない。その秘密は「女らしさ」である。

第三に、これもまたすでに言及したことだけれども、「声優おたく」たちはマイナーで

あることを志向する。そもそも、世間に認知され、どんどんメジャーになっていく「アニメおたく」から彼らが分化してきた背景にも、そのような心性が働いていると想像することができる。他者との差を強調しようとする点は男性的だけれども、その結果として新しい小集団を形成していく様子は女性的である。集団の規模を小さくして、その分、メンバー間の親密な関係を強化しようとする戦略は、実際、子供たちの遊戯を観察するたびに報告されている女性的事実である。

さて、すでに指摘した諸点について、「声優おたく」の両性的な性格を分析し、そこに両性具有の可能性を探ったわけだが、なるほど、これらは「宝塚ファン」にも当てはまる特徴であった。だが、「宝塚ファン」は優れて女性的な現象であり、「声優おたく」は優れて男性的な現象である。このことは、つまり、男性的であれ、女性的であれ、実はあまり異なっておらず、どちらも両性的だということ示している。そうだとすれば、「声優おたく」において抽出された「女らしさ」の正体は、実のところ、あらゆる種類の人間の中に普遍的に見出されるようなものなのであって、その「女らしさ」の源についても、倒錯した男性に限って特に見出されるというようなものではないのであろう。

結び

「男らしさ」を「女らしさ」に両立させる性向は「声優おたく」の心性においてだけ見出されるような限定的なものではない。彼らの行動においてとりわけ目立って現れてきているというだけのことなのだろう。アニメーションにおける声はその作品を構成する最もリアルな要素であり、その声の主に関心の焦点を移行させる「声優おたく」は、だからこそ、「アニメおたく」以上に両性的な性格をアピールするのかもしれない。リアルであればあるほど、個別的であればあるほど、性差はいよいよ際立ってくるものだが、彼らはその一歩手前で立ち止まることによって両性的性格を際立たせることとなる。

われわれは決して、「声優おたく」になることを奨励して、それが両性具有の可能性の唯一の条件だと説得したいわけではない。その反対で、実際、両性具有者は至る所に見出されるもので、あらゆるタイプの人々に開かれた可能性であると指摘したいのである。そして、両性具有の普遍性を発見することから逆に気づかされることは、われわれの生活習慣に深く染み込んでいると思われがちな性別規範が、実のところ、そうでもないということ、そして、そのような規範をどのようにでも受け入れうる身体の豊かな可能性

のことである。社会的な構成に基づいて自由にデザインされうる——モラル・フリーな——身体はだから、その意匠をまたいつでも変更することができる。もっとも、特定の個人のデザインに基づいて恣意的に遂行されるような構成ではないから、共同体を構成する主要メンバーの合意がなければ容易に変更できるものでもないのだが。

個々にとってそれぞれ固有な身体について合意を形成することは難しいし、だからこそ、そのような形成に成功したデザインを変更することもそう簡単なことではない。そのような合意を形成する共同体のメカニズムについて理解が深まることを期待しながら、それでも、次のことだけはここで主張して終わりたいと思う。「おたく」は共同体の病理を告知する症状として簡単に告発できるようなものではないということ、そうして済ませてしまうには惜しいものだということ、それはむしろ、われわれ＝身体 of 自然な在りようについての探求に貢献する重要な手掛かりの一つなのかもしれない。「声優おたく」の出現は社会が病んでいることの赤信号ではなく、新しい社会形成の可能性を切り拓く一つの青写真なのである。できれば、その可能性が明るいものであることを願っている。

¹ Glassner, Barry, *Bodies*, 1988; 『ボディーズ』、小松直行[訳]、マガジンハウス、1992。

² 収獲の無際限な増進を信じる楽観的な態度はまず啓蒙哲学において進歩主義として現れ、ヘーゲルの歴史哲学——自由の観念の発展にほかならない——においてその頂点に達した。限界革命における消費主義の登場については、Birkin, Lawrence, *Consuming desire : sexual science and the emergence of a culture of abundance, 1871-1914*; 『性科学の誕生』、大田省一[訳]、金沢、十月社、1997 を参照のこと：「限界主義革命は、消費、つまり個人の欲望の充足があらゆる人間活動の目的であり、従って道徳的な監視を免れているものとした」(49)；「[経済は]根本的に個人に特有な心理を満足させる単なる手段(技術)という性質のものでしかなくなった」(50)；「新古典派のシステムでは、欲望こそが社会を動かす唯一の基準である」(53)。そして、欲望を基準として与えるために成立した新しい規範が性科学である。

³ 『Voice Animage』(徳間書店、1992 年創刊)、『声優グランプリ』(主婦の友社、1997 年創刊)、『アニラジグランプリ』(主婦の友社、1997 年創刊、1999 年休刊)、『hm 3』(音楽専科社、1997 年創刊)、…。

⁴ 本文は「宝塚歌劇」の本格的でない点ばかりを強調しているが、実のところ、若い女性だけの劇団が成功したことの演劇史における意義は小さくない。古典的な演劇一般において、女優に割り当てられる役の種類は少なく、主役の美女でなければ、乳母か召使の役くらいのもので、重要な役はいつも男性に独り占めされてきた。だからこそ、女性が男性を演じる「男役」は女優の可能性を開拓する魅力に満ちていたのであり、大部分の宝塚ファンを現に掴んで離さないのは「男役」である。

⁵ 草葉たつや『宝塚の法則』、青弓社、2000、p. 64-65。

⁶ 予言可能性を持たない進化論を「物語り(narrative)」として読み直そうとする観点から見ると、読者の帰属する時代状況へのダーウィンの順応ぶりはむしろ意図的な戦略ということになるのかもしれない。小川真理子『甦るダーウィーン——進化論という物語り』、岩波書店、2003、第三章「物語る『種の起源』」を参照のこと。

⁷ これらの[似非]科学におけるもっともお気に入りの話題が女性と子供との類似であった。そのような

類似が科学そのものの話題となることはさすがにもうないのかもしれないが、それでも科学者共同体が男性的な性格を根強くもっていることは今でも相変わらずである。科学が男性の占有物であるという偏見は学校で再生産され、日々、強化され続けている。教育現場における性差別——社会的に認められている唯一の差別で、その害は女子のみならず男子の可能性をも蝕んでいる——については、Sadker, Myra & David, *Failing at fairness – how our schools cheat girls*, 1994; 『「女の子」は学校でつくられる』、川合あさ子[訳]、時事通信社、2004 を参照のこと。

⁸ 例えば、Schiebinger, Londa, *The Mind has no sex? Women in the origins of Modern Science*, Cambridge, Harvard University Press, 1989; 『科学史から消された女性たち——アカデミー下の知と創造性』、小川真理子+藤岡伸子+家田貴子[訳]、工作舎、1992、及び、荻野美穂『ジェンダー化される身体』、勁草書房、2002、第5章「フェミニズムと生物学」を参照のこと。

⁹ Badinter, Elisabeth, *XY – De l'identité masculine*, Odile Jacob, 1992; 『XY 男とは何か』、上村くにこ・饗庭千代子[訳]、筑摩書房、1997。

¹⁰ いわゆる中絶法の成立はイギリスでは1967年、フランスでは75年、イタリアでは78年のことである。日本でも人工妊娠中絶が新聞紙上を賑わせ、「母性」の崩壊が危惧されはじめたのは1970年代前半のことであった。日本における「母性」論争については、田間泰子『母性愛という制度——子殺しと中絶のポリティクス』、勁草書房、2001を参照のこと。

¹¹ 父権制の解体もまたゆっくりと進行し、フランス革命以来、女性の自己決定権奪還に至るまでの長い時間、およそ200年を経て漸く完成しつつある。父権制の終焉に至る長い道程については、E. Badinter, *L'Un et l'Autre, des relations entre hommes et femmes*, Paris, 1986; 『男と女』、上村くにこ・饗庭千代子[訳]、筑摩書房、1992を参照のこと。

¹² バダンテールは、男性的でも女性的でもない中性的あるいは無性的な存在者が健全な社会活動を営む可能性を疑っている：「いつでもどこでも観察されるこの現象[子供にとって男女の分離は普遍的である]を考えれば、性的差異を否定する人々は慎重に構えなければならないだろう。性差はたしかに、女性に対する恐ろしい武器として父権制に利用されてきたが、また同時に子供のアイデンティティ意識の前提となる基本的条件の役割を果たしてきたのも確かである。差異を否定すれば、性の混乱を引き起こしかねない。この性的混乱が男女の平和にとって好都合であったことはこれまで一度もない。差異は私たちが踏んでいかなければならない一つのステップであると認めること、それだけが、後に、男女が共に両性性を持っていること、言い換えれば、男女が類似していることを認めるただ一つの手段である」(『XY』、p. 80)。

¹³ 「鉄骨男」はかつてカウボーイによって代表されていたが、その典型は今では『ターミネーター』(1984)であり、その身体は文字通りの鉄骨である。

¹⁴ 拙論「ケア倫理の可能性の条件としての唯物論」、*Prospectus*, No. 7 (2004)、p. 25-26 を参照のこと。

¹⁵ 例えば、『書物の王国⑨——両性具有』、国書刊行会、1998を参照のこと。

¹⁶ ただし、南方熊楠などは単なる女々しい男と男の精神を持ちながら女のような美貌を備えた若者とをはっきり区別しており、性差のキャンセルではなく、両性の共存にこそ両性具有の美を見出している。

¹⁷ 例えば、Foucault, Michel, « Le vrai sexe », *Arcadie*, 27^e année, n° 323, 1980、あるいは、Serre, Michel, *Hermaphrodite – Sarradine et sculpteur*, Flammarion, 1987、…。

¹⁸ ディドロは女性論的観点を提出した最初の哲学者の一人でもある(*Sur les femmes*, 1772)。

¹⁹ Suratteau, Aurélie, « Les hermaphrodites de Diderot » in *Diderot et la question de la forme*, Paris, Puf, 1999。

²⁰ 性差について論ずる多くの社会理論において繰り返し指摘され、そして採用されているメルクマールであり、われわれはしかも、この同じメルクマールが欧米人のみならず、日本人についても当てはまるものと判断する。例えば、Tannen, Deborah, *You just don't understand – woman and man in conversation*, New York, Ballantine Book, 1990、並びにGray, John, *Men are from Mars, women are from Venus – the definitive guide to relationship*, London, Harper Collins, 1992 を参照のこと。

【文献】

- － Badinter, Elisabeth, *XY – de l'identité masculine*, Paris, Odile Jacob, 1992 ; 『XY 男とは何か』、上村くにこ・饗庭千代子[訳]、筑摩書房、1997
- － Birkin, Lawrence, *Consuming desire : sexual science and the emergence of a culture of abundance, 1871-1914* ; 『性科学の誕生』、大田省一[訳]、金沢、十月社、1997
- － Darwin, Charles, *On the origin of species*, 1859 ; 『種の起源』(上・下)、八杉竜一[訳]、岩波文庫、1991
- － Glassner, Barry, *Bodies*, 1988 ; 『ボディーズ』、小松直行[訳]、マガジンハウス、1992
- － Gray, John, *Men are from Mars, women are from Venus – the definitive guide to relationship*, London, Harper Collins, 1992
- － 草葉たつや 『宝塚の法則』、青弓社、2000
- － 小川真理子 『甦るダーウィン——進化論という物語り』、岩波書店、2003
- － 荻野美穂 『ジェンダー化される身体』、勁草書房、2002
- － Sadker, Myra & David, *Failing at fairness – how our schools cheat girls*, Simon & Schuster, 1994 ; 『「女の子」は学校でつくられる』、川合あさ子[訳]、時事通信社、2004
- － Schiebinger, Londa, *The Mind has no sex ? Women in the origins of Modern Science*, Cambridge, Harvard University Press, 1989 ; 『科学史から消された女性たち——アカデミー下の知と創造性』、小川真理子+藤岡伸子+家田貴子[訳]、東京、工作舎、1992
- － 白洲正子 『両性具有の美』、新潮社、1997
- － Spencer, Herbert, *Education ; Intellectuel, Moral, and Physical*, 1860 ; 『知育・徳育・体育論』、明治図書、1969
- － 田間泰子 『母性愛という制度——子殺しと中絶のポリティクス』、勁草書房、2001
- － 田辺麻紀／長峰洋子 『宝塚 悩殺武芸長』、DAI-X 出版、2001
- － Tannen, Deborah, *You just don't understand – woman and man in conversation*, New York, Ballantine Book, 1990

(大阪教育大学非常勤講師)